

「背水の陣で臨んだ挑戦・結実」

真の「ものづくり」を目指して

岐阜市切通にある神谷マテリアル岐阜株式会社は、肌着やTシャツなどの製造販売、ニット生地の販売をしている会社です。始まりは大正七年。その頃、切通の辺りなど中山道沿いのあちうごちうに着物の正絹を織る機屋が何十軒と立ち並び、朝早くから機織り機の音が町を賑やかにしていました。そのうちの一軒が、初代の神谷松次郎さんが創業した機屋でした。以来、幾多の荒波を越えて、今、新しい技術「炭」を用いたオリジナル製品の展開に挑戦しています。

今月号では父から子へと繋いできた「着るもの」へのこだわりなどを、三代目の神谷悟さんに伺いました。

神谷マテリアル岐阜株式会社 代表取締役 神谷 悟さん



がむしやらに働く父母の姿

初代の松次郎さんは、創業時より着物の正絹を織り、京都などに納めていました。二代目は悟さんの父である勇さんでしたが、松次郎さんは、勇さんが出征する直前に亡くなってしまいました。

昭和二十一年、勇さんは戦地から戻ると、翌年、有限会社神谷メリヤス工場を立ち上げ、正絹の機織り機からメリヤス（ニットの古い呼び名）を織る機械へと移行し、県内で2番目という早さでメリヤスを取り入れた肌着生地などの製造販売を始めました。

勇さんは、何もかもが「一からのスタート」でした。

「父は全てひとりでがむしやらにやっと思えます。何でもチャレンジし、とにかくへこたれず、諦めない人でした」

そんな父のエピソードをこう語ります。

「戦後、原材料の糸は配給制でした。しかし配給分だけでは製品を作ることが出来ず、当時柳津にあった岐阜紡績まで一人でリヤカーを引いて糸をもらいに行ったり聞いている。それでも必要な量が得られず、担当者に必死に頼み込んで糸を回してもらうなど、糸を集めることも一苦勞でした。しかし、どんなに困難にぶつかっても『戦争では命を取られることがあるが、商売は命まで』

取られることは無い」と常々言っていました。戦場で鉄砲の玉の下を掻い潜り、その中から必死に生きて戻った父らしい言葉です」

母親の苦勞にも接してきました。 「自宅の隣が工場だったこともあり、母は夕食の後片付けを済ませるとすぐに仕事に戻りました。夜なべをして働く母を少しでも助けたいと小学生の頃から手伝いをしていました」

そんな両親の姿を間近に見てきた悟さんは、物心ついた頃から少しでも早く2人の役に立ちたい。業にさせたい」と、心に決めていました。

「着るもの」こそ、安全で安心に

昭和二十五年に勃発した朝鮮戦争を機に日本で発生したガチャマン景氣により、繊維業界の売上は右肩上がりでしたが、その後の二度のオイルショックによる糸の値段の高騰、海外への企業進出や現地生産などへの切替などにより、国内工場は徐々に衰退していきました。

それでも、岐阜ではその頃はまだ近隣に縫製工場、染色工場、裁断工場がいくつも残っていました。悟さんは「今こそ、ものづくりの幅を広げたい」と、平成四年に神谷マテリアル岐阜株式会社と名を新たにし、会社の規模を拡げることを決意しました。

その理由はただ一つ「自分の目指す真のもののづくりがしたい」という想いでした。

「健康には、食べ物同様『着るもの』も安心で安全な製品が一番良いと考えています。自分が納得いく材料で、自分の目の届くところで、良い物だけを作り続けたかったです」

その答えが「国内生産」でした。

新たな挑戦「炭を着る」

繊維産業はその後バブル崩壊などによりますます衰退し、悟さんは「工場閉鎖もやむを得ない」というところまで追い込まれていました。

そんなある日、地域の会合で同業者から「大阪で炭を練りこんだ糸があるらしい」という情報を耳に入れました。元々、炭の温かさや消臭効果など、炭の持つ潜在能力を気にかけていた悟さんは、直感的に「この糸を使つて商品開発をすれば健康で快適な製品を作れるのではないか」という想いが頭を駆けめぐりました。

すぐにメーカーを調べ、次の日にはそのメーカーを訪ねました。「炭を練り込んだ糸で生地を作り、肌着などの製品を作りたい、自社ブランドを立ち上げたい」と経営者に直談判。その熱意が伝わり、糸の供給を受けられることになりました。そして半年間の試行錯誤を経て、ようやく納得のいく製品が出来上がりました。同生地で作った商品をオリジナルブランド「炭を着る」と名付け、肌着や靴下など様々な製品に展開させました。

しかし、すぐには思うように売り上げに繋がりませんでした。

その中で、平成十三年、四十七歳の時に、悟さんは父勇さんから後を託され三代目に就任しました。

「真のもののづくり」のために

その後も暗中模索の日々が続くなか、ある業界関係者

より、製品に対して実績と信頼を確かなものにする「実証データ」が必要ではないか、とのアドバイスを受けました。

悟さんはそこに希望の光を見出そうと、直ぐに動きましました。以前から懇親のあった岐阜大学の医師の協力を得ることができ、早速「健康の効果」の検証をはじめました。しかし、結果は期待通りにはいかず、悟さんが思うような数値を得ることはできませんでした。

それでも、せっかく手に入れた検証データから自分の目指す「真のもののづくり」として何か見いだせないかと、データを血眼になって検証し続けたところ、炭を練りこまれた肌着を着た被験者から免疫細胞が増加したという新事実を見つけることが出来たのです。

その学術結果は、平成十七年、岐阜大学と悟さんの共同研究として「第十八回日本バイオセラピー学会学術集会総会」で「炭含有繊維シャツは末梢血中のリンパ球や単球などの免疫担当細胞を介して生体の免疫系に何らかの影響を及ぼす可能性が示唆された」と発表されました。

「データから実証されただけでなく、私も共同研究者として学会で発表できた、という最高の結果まで付いて本当に嬉しかったです」

必死の想いで形にした「炭を着る」シリーズは、正に背水の陣で臨んだ挑戦。そして、その結果は結実しました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「人間、楽をしようとする、さまざまな手順をショートカットしようとする」があります。しかしたった数秒、一つのチェックを飛ばしただけで、良くない結果となりその修復や見直しの確認にその何百倍、何千倍の時間がかかり、かえって回り道をしてしまうこともあります」

常に着る人の「安全・安心」のために、丁寧に。その「基本」に忠実であることを何よりも大切に。

悟さんのものづくりへの挑戦はこれからも真つすぐに続いています。



機織時代の初代工場の鬼瓦

機織時代の糸巻

継往開来

— 継承・発展 未来を切り開く —